わが国の平安時代における 「土木事業の空白期」に関する研究

西山 孝樹¹・藤田 龍之²・知野 泰明³

¹学生員 日本大学大学院 工学研究科 (〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1)

E-mail: g2211@cc.ce.nihon-u.ac.jp

²正会員 イムノサイエンス株式会社 元日本大学教授 (〒963-8852 福島県郡山市台新1-10-11)

³正会員 日本大学准教授 工学部土木工学科 (〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1)

E-mail: chino@civil.ce.nihon-u.ac.jp

わが国では、10世紀をピークとして9世紀から11世紀にかけて、「土木事業の空白期」が存在していたことを本研究で指摘した。その背景には、10世紀における律令国家の崩壊が最も影響したと考えられる。そして更なる要因として、平安貴族を中心に、土の掘削を忌み嫌う「犯土」思想が、10世紀後期から11世紀に存在しており、その思想が「土木事業の空白期」に影響を及ぼしていたとみられることを示した。

しかし、空白期における土木事業は、全く実施されなかったわけではなかった。わずかではあるが、僧によって行われており、文献史料を中心に彼らの事績をまとめた。そして、「犯土」思想が僧による土木事業に影響を与えたかについても迫り、平安時代における「土木事業の空白期」の実態を明らかにした。

Key Words : Heian period, civil engineering project, blank time period, Bon-do

1. はじめに

筆者らは、わが国の土木史研究の発展を図るため、これまで土木史研究委員会が編集に携わった過去1981年から2010年までの論文1,460編を「分野」及び「テーマ」ごとに設定した分類項目に沿って整理作業を進めてきた¹⁾。一連の作業の中では、表-1で設定した区分(第I～第IV期)ごとに各論文が研究対象とする時代についても分類し、その結果を図-1に示した。近世以後の研究は、全体の9割を占め、それ以前の「古代～中世」を対象とする論文は全体の1割に留まっており、非常に少ないということが浮き彫りになってきた。各論文が研究対象とする時代は近世以降が主となっており、その偏りが著しいという現状となっている。

「古代～中世」を対象とした研究は進められておらず、土木に関して明らかになっている史実は少ない。そこで、まず始めに近世以前の土木史を概観していくこととした。

そして、本研究で取り上げた土木事業は、古墳の造営を除いて、公共性が高く現在の土木に繋がる社会基盤として整備された事業と定義した。高野山や比叡山における伽藍の造営では、種々の土木事業が実施されていたと考えられるが、寺院の基壇は、現在において「地業」に該当し、取り付け道路の造成についても建築構造物に付

随した作業であったと考えられる。そのうえ、高野山は長きに渡って、女人禁制が敷かれていた。それ以外の修験の場における土木事業が行われていたとしても、一般の人々に向けたものではなく、本研究で定義した社会基盤整備ではないと考えられるため、それらは除外して考察を進めた。

表-1 土木史研究論文の時代区分に関する分類項目

区分	対象年代
第I期	古代～中世
第II期	近世(主に江戸時代)
第III期	近代(明治～第2次大戦)
第IV期	現代(第2次大戦後)

図-1 土木史研究論文の時代区分の分類結果²⁾

2. 平安期の「土木事業の空白期」について

図-2 を用いて、近世以前における土木事業を遡ってみていくと、3 世紀頃から、大阪府堺市に現存する全長 486m、幅 305m もの大規模な大仙陵古墳（現、仁徳天皇陵）に代表される古墳が畿内を中心として、全国各地で造営された。その後、大化 2（646）年に薄葬令が發布されたことも相まって、7 世紀末か 8 世紀の始めには古墳の造営が終焉を迎えていった^{3,4)}。

その後も、天智天皇 3（664）年の福岡県太宰府に築かれた防衛のための「水城」、700 年初頭の『古事記』、『日本書紀』の国史に記載されている狭山池（大阪府）や大宝年間（701～704）の満濃池（香川県）築堤等が挙げられる。その他にも、7 世紀後半から建設が開始された古代道路の存在があり^{5,6)}、10 世紀頃まで機能していたとされるが、終末期の状況は明らかになっておらず、どの程度の規模で機能していたかは不明である。その後も地方の道路整備の記録はあっても大規模なものは文献上に出てこない。

奈良時代の土木構造物では、弘仁 2（811）年『日本後紀』⁷⁾の記述に、出羽守従五位下大伴禰今人という人物が、古代中国で灌漑水路を開いた西門豹であってもできなかった大渠を開削したと記されている。しかし、実在した場所は特定されておらず、痕跡も残っていないため、大袈裟な文章表現であったとみられる。

そこで、図-3 には 8 世紀頃から 9 世紀頃における『六国史』に記載された土木事業数の推移をまとめた。

『続日本紀』が対象とする 8 世紀に大きく土木事業が伸びていることがわかる。しかし、それ以後では、大きな変化はみられない。鈴木らによれば、橋梁を除く土木事業は、築造から修造へというメンテナンスの時代に移り変わっていったと推測された⁸⁾。

さらに、全時代の土木に関する事績がまとめられた『日本総合土木史年表』に記載された土木事業数を各世紀ごとにまとめたものが図-4 である⁹⁾。この図からも図-3 と同様、8 世紀に土木事業が増加していることがわかる。そして、9 世紀から土木事業数が減少していき、10 世紀には空白期のピークになり、11 世紀にかけて、土木事業が積極的に実施されなかった「土木事業の空白期」が存在していたとみられる。

続く、平安時代後期の武家政権が台頭する 12 世紀に入ると、天仁元（1108）年、群馬県では浅間山噴火後に開削された「女堀」という全長約 13km の用水路が遺跡として発掘されているが、それに関する文献は発見されていない。何の目的で開削されたのかも不明で、工事途中で放棄された未完成の状態でもある¹⁰⁾。

平安時代末期の承安 3（1173）年、平清盛による大輪田泊の修築、鎌倉時代には、忍性も関わったとされる

種々の切通し、文永 11（1274）年の「元寇防塁」が築造された^{11,12)}。土木事業は所々でみられるようになったが、図-4 をみても 8 世紀と 16 世紀にみられるような大幅な土木事業の伸びはみられない。

その中世の土木に対する評価、歴史的価値について記述された代表的な文献として、『明治以前日本土木史』が挙げられる。河川に関するものでは、

「前述の如く本邦に於ける河川工事は、既に仁徳天皇以降歴代之に意を注がれしが、其事蹟の記録に傳はるもの寔に尠し¹³⁾。」

とある。溜池・灌漑等に関する章では、地方の事跡は所々で見られるものの室町時代の節では、

「此時代には農業政策は文書の徴すべきもの少く、耕地開発池溝水利の如き恒久的事業は、地方自治の私的機関によりて經營せられたるが如きも、其史實を明にし難し¹⁴⁾」

と表現されている。11 世紀から中世において、紀州（和歌山県）を流れる紀の川上・中流域における灌漑水利状況に目を向けても、紀の川本川からの直接取水ではなく、そこに注ぎ込む小規模な河川に設けた堰や谷筋に溜池を築堤して灌漑が行われていた程度であった¹⁵⁾。

図-2 土木事業の空白期概要図

図-3 『六国史』に記載された土木事業数の推移

図-4 『日本総合土木史年表』に記載された土木事業数の推移

3. 研究目的

1章および2章では、近世以前の土木事業を整理し、「土木事業の空白期」の存在を指摘した。その空白期とみられる9世紀から11世紀を本研究の対象とする時代とし、平安時代中期の10世紀を中心に、政府の人々の間に「犯土」思想が浸透しており、それが空白期の一因となっていたことを4章で詳述した。その思想は、『続日本紀』のような正式な歴史書、いわゆる国史上には表れず、当時の公的な記録には残らなかったと考えられる。そこで、当時の人々の思想や日常生活に関しては日記から、空白期に迫っていくこととした。

また、その空白期が存在していたとしても、該当する時代に土木が全く実施されていなかったわけではなかった。僧が指導的な立場で土木に携わっていた記録があり、その繋がりは従来から指摘されてきた¹⁶⁾。5章では、先行研究である高橋裕他によってわかりやすくまとめられた『人をたすけ国をつくったお坊さんたち』等^{17) 18)}を参考に、9世紀から11世紀の空白期に行われた僧による土木事業を元史料の確認を基本として整理した。そして、「犯土」思想によって、僧による土木事業がどう変化したのかについても迫った。

本研究では、平安時代における「土木事業の空白期」の存在を明確にし、該当の時代における土木の実態を明らかにすることを目的とした。

4. 「犯土」（土木事業の空白期を生んだもの）

わが国の土木事業は、9世紀頃から衰退し、10世紀をピークとして11世紀にかけて、「土木事業の空白期」が存在したと考えられる。そこで本章では、「土木事業の空白期」のピークであったとみられる平安時代中期の西暦1,000年前後に「犯土」、「犯土忌避」という思想が存在していたことが明らかになり、その思想について本章では、詳しく述べた。

(1) 「犯土」とは何か

「犯土」の語義を『日本国語大辞典』¹⁹⁾に求めると、「土を掘ったり動かしたりすること。陰陽家の説で土中には神（土公＝つちぎみ）がおり、土を掘ったり動かしたりする時期をあやまると、そのたたりを受けるとされたところから生じた語。」

とあり、『広辞苑』には掲載されていない語で、陰陽道の中に「犯土」という思想があった。

山下克明²⁰⁾によると、陰陽道は、中国古代の陰陽五行説に基づき、中国において体系化されていたと考えられてきたが、中国の学術・宗教を典籍を通して採用し、わ

が国において体系化したものであって、それは陰陽五行説だけではなく、密教や道教等の典籍に依拠していたということも指摘されている。さらに、陰陽道という用語は中国では用いられず、日本では10世紀頃から一般化し始めたのもであるともいわれる。

「犯土」に関する先行研究は、深澤暲²¹⁾によって行われている。

「陰陽道において、土中には、土をつかさどる土公神がいて考えられていた。土公神は、遊行する神であり、その折の居場所や方角で、土とかかわる建築・土木工事などを行なうことは犯土とされ、忌みの対象であった。」

などと述べられ、元史料を提示しながら「犯土」の詳細を追及している。

繁田信一²²⁾によっては、平安貴族が新しい家宅への引越し「新宅移徙」の際に、土公神を鎮める祭祀を陰陽師が指導していたとし、土公神は、季節に応じて竈・門・井・庭のいずれかに宿る神であるから、その祟りは身近なものであっただろうと述べている。

この思想が「土木事業の空白期」に対して、重要な意味を持ち、平安時代に重くのしかかっていたと考えられる。

(2) 『朝野群載』にみる「犯土」の影響について

続いて、平安時代の国政運営の手引書である『朝野群載』^{23) 24)}の天延2(974)年9月7日、陰陽師加茂保憲勅文には、「犯土」の項目があり、以下に全文を示す。

「犯土禁忌

勘申隣里犯土禁忌歩數事

陰陽書云。居郭邑内者。土氣去宅卅五歩。各爲一區過之外。土氣不害人。掘地起土。深過三尺爲害。不滿三尺無害。本命法云。禍害。絶命鬼吏。五墓之郷。去舍三百歩内。雖身不往。害人作病云々。

今案。隣里犯土。大將軍。王相等方忌卅五歩内。御忌方三百歩内。三百歩者四町餘也。但自身犯土造作者不論遠近。猶可忌之。仍以勘申。

天延二年九月七日

主計頭加茂朝臣保憲

「陰陽書の云はく、郭邑の内に居らば、土の気の宅を去ること三十五歩、各一区と為す。之を過ぐるの外、土の気も人を害さず。池を掘り土を起し深さ三尺を過ぎれば害と為る三尺に満されば害なし。但し、自身犯土造作すれば、遠近を論ぜず猶これを忌むべし」

この時代に「犯土」という文言が書かれていたということは、それ以前から、人々の間にその意識が広がっていたと考えられ、詳しくは次節で後述する。国家、国政運営の手引書の中に「犯土」が書かれ、池を掘り、土を掘削することを禁止する項目が示されていれば、国家が主導して土木事業を実施することはなかったと思われる。

また、掘削する深さの制限を三尺（約90.9cm）としたのは、当時の経験則を踏まえた土が崩れてくる素堀りの限界であったのであろうか。工学的な観点からの分析は進められていないため、不明である。

また、「犯土」が及ぶ範囲は三十五歩となっているが、先の深澤²⁹⁾によって四十五歩（約82m）であると指摘されている。それは、『古事類苑』所蔵の「朝野群載」で四十五歩となっていること、さらに4.(3)で示す『中右記』2.嘉保元（1094）年11月3日の項で二十七丈と書かれている事に依る。同じく4.(3)で提示した『蜻蛉日記』にみられるように「犯土」が及ぶ際には自宅を離れ、別邸に移動していた。三尺（約90.9cm）以上掘ってはならず、四十五歩（約82m）以内に近づいてはならない状況で土木事業が実施できたとは思えない。

このような場合であっても掘削を伴う構造物にトイレがある²⁹⁾。平安時代の外交使節接待のための鴻臚館は、平安京、難波（大阪）、太宰府（福岡県）の3ヶ所に設けられた。そのなかで唯一、太宰府の鴻臚館が遺跡として発見されている。最近の発掘では、8世紀前半から中頃の遺跡と推定され、このトイレの遺跡に関しては、土坑の復元の深さが約4m前後で「犯土」の限界を超えている。その後、12世紀末から13世紀前半頃の鎌倉政所跡におけるトイレの深さは、0.5mないし0.7m、鎌倉政所跡と同時期とされる米町遺跡（鎌倉市）では、0.6mの深さである。平安時代初頭には、技術的に掘削が可能であったにもかかわらず、中世に入ると浅くなっていることから、「犯土忌避」の影響を受けていたことが発掘調査からも垣間見える。

その他に制限があったとしても、三尺以上の掘削をせざるを得ない作業として、井戸が挙げられる。福岡平野の比恵遺跡群で、弥生時代中期末～奈良・平安時代に掘られた井戸の深さは1.5m～3.0m（第一地下水面）、それより深い第二地下水面の深さ4m付近まで掘られた井戸は弥生時代中期末～後期前葉に限定される²⁷⁾。これは、やはり「犯土」の影響があったとみられるが、他の同時代の遺跡でも、「犯土」となる三尺を超えた深さの井戸が存在することから、水を得ることが第一であって、例外的な作業であったのではないだろう。

また、鐘方正樹²⁸⁾によって、井戸の祭祀が行われていたことが発掘された遺物の出土状況を踏まえて述べられている。祭祀は、井戸の構築時、使用時、埋め戻し時の三段階があり、構築時、使用停止後のものは8世紀頃、使用中のものは10世紀頃から陰陽思想も影響していたと述べている。井戸の祭祀という大筋では古来からの思想が深く関わっていたとみられる。

(3) 日記に書かれた犯土

当時の人々が持ち合わせていた思想は、国史等の公的

な文書や記録等にはみえてこないと考えられる。そこで、当時の日記や記録等の全文を読み通し、「犯土」に迫っていくことで、空白期の裏付けが得られると考えられる。

藤原実資（957～1046）が天元5（982）年～長元5（1032）年の間に記した『小右記』²⁹⁾が現存している。記録された年月が長期間にわたることもあり、表-2に示したように、「犯土」の記述が最も登場する。

藤原道長（966～1027）が長徳4（998）年～治安元（1021）年に記した『御堂関白記』³⁰⁾には、以下4ヶ所に散見する。

1. 寛弘元（1004）年10月29日
「土御門第では井戸を修繕している。そこで犯土の禁忌を避けるために読経を移したのである。」
2. 寛弘4（1007）年10月2日
「土御門第において犯土の禁忌を犯すことになるので、一条第に移った。」
3. 寛弘8（1011）年3月14日
「早朝、土御門第から女方が、やって来た。これは、土御門第に犯土の禁忌があったことによるものである」
4. 長和2（1013）年4月5日
「雅通の宅から皇太后に参った。土御門第に至って、還って来た。夜に入って、また雅通の宅に行った。これは法興院の犯土の禁忌が、未だ終わらないからである。」

藤原道綱母（？～995）が天曆8（954）年～天延2（974）年の間に記した『蜻蛉日記』³¹⁾では、1ヶ所で確認できる。

- ・天禄3（972）年
「二十七八日のほどに、土犯すとて、ほかなる夜しも、めづらしきことありけるを、人告げに来たるも、何事もおぼえねば、憂くてやみぬ。」

現代語訳を以下に示すと、

「二十七、八日のころに、土を犯すというので、他へ移った。ちょうどその夜、あの方から珍しく使いが来たことを、留守居の者が知らせに来たけれど、なにも思い浮かばなかったので、もの憂いまま返事もせずじまいになった」

これは、4.(2)で示した天延2（974）年の『朝野群載』よりも2年前の記述である。

11世紀の終わりから12世紀初頭の藤原宗忠（1062～1141）による『中右記』³²⁾が存在し、応徳元4（寛治元、1087）年から保延4（1138）年までの51年に及んで記されたとされる。しかし、そのうちの約18年分が現存するに留まる³³⁾。その中で、「犯土」に関するものが3ヶ所でみられる。

1. 寛治7（1093）年1月19日
「近日禁井破損、在皇居戌亥角、仍今日修理、爲避土公丈尺之外也、」

2. 嘉保元(1094)年11月3日

「今日戌剋立内膳屋，其所從町尻東，御倉町中也，先申殿下奏事由，只今之御所東對廿七丈之中也，可令避犯土」御也，中寢殿西庇暫供御座，」

3. 康和4(1102)年12月23日

「興福寺金堂・迴廊・南大門作事欲急作之處，女御被懷妊之間可無便，奏事由，犯土造作可止也，但至長者本寺沙汰事者不可止者，以頭中將奏事由下知本寺了，」しかし，上記に示した項目は，増補史料大成刊行会編の『中右記』³⁴⁾には掲載されておらず，東京大學史料編纂所編纂の同史料にはみられた．この東京大學史料編纂所編纂の『中右記』は，全10巻のうち3巻が未刊であり，「犯土」の項目が増える可能性がある．以上のことから，『小右記』を始めとして，日記に「犯土」が記載されるのは10世紀後半からで，「犯土忌避」という思想が，その頃に生まれたものと考えられる．

さらに，鎌倉時代に成立した『吾妻鏡』の建暦3(1211)年7月9日条³⁵⁾には，「犯土」の記述がみえ，以下に示す．

「陰る．御所の造營，犯土ならびに將軍御方違等の事，重ねてその沙汰あり．」

このことから，13世紀初頭の鎌倉時代においても，「犯土」思想が引き続いて影響していたとみられる．

(4) 平安時代後期から土木事業に携わった人々

平安時代以降において，地方から自然災害や飢饉，逃散等の種々の理由により職を失った人々が都に集まり，中には放免された犯罪者も含まれていた．そのような社会から除外された人間の多くは，寺に付随したり，無所有の坂や鴨川に代表される河原等に住むようになった．

網野善彦³⁶⁾によると，建永2(1207)年の『法然上人絵伝』から，檢非違使(京都の犯罪・風俗の取り締まりなどの警察業務)の集団の中に河原で下級刑吏となった放免囚人が処刑しようとする場面が描かれている事に触れ，その放免された人々が，処刑された武士や誰も葬送する人のいない死体を河原に運んでいたという³⁷⁾．彼等は，非人と呼ばれ，どの時代から存在していたか明確にされていないが，網野によると，

「鎌倉後期，洛中洛外を中心として非人が多数おり，その居住地やその活動状況から見て，葬送，刑史・掃除・土木工事に従事し，乞食・芸能にも関わりを持ち，病者・囚人を含むと見られるこうした非人集団が，鎌倉中期以降存在した．職能集団を形成するようになるのはおよそ11世紀，平安後期以降のことと思われる．」と述べている．また，各種の職人を一つの工事・作業に組織する役割を果たした勸進上人，聖は平安後期から各地に見出すことができ，職人との結びつきにも言及している³⁸⁾．さらに，鎌倉時代に入って叡尊(1201～1290)

表-2 『小右記』にみる「犯土」の記述箇所一覧

和暦 西暦	月日	事 象
永延元 987	4/2	甲午，為避 犯土 忌度進宅，参宮，奉謁大相府北御方，入夜歸度二條，
永祚元 989	7/20	口退，女人等相俱歸，依 犯土 了，
正暦元 990	12/14	可参之由有左府之命，令申障由了，今夜以陳奏朝臣令 祭土公 ，
正暦4 993	6/10	丁卯，依 犯土 事，今朝女房相俱向仁海師許，尼病平愈，
寛弘8 1011	3/19	土用間誠雖不 犯土 不可行公事，亦當方坎，
長和2 1013	2/12	義行試掘四五寸，水湧出，其流入池，太有興，依 土公 不出，
	2/28	絶命・禍害・鬼吏方三百歩内可忌 犯土 ，而件馬留舎已四百歩外也，
長和3 1014	3/6	五星所在日月， 起土 蓋屋重所忌避也，又天一天上之間，蓋屋同所忌也，
	5/25	仍早朝出西侍從宅，先日依來申也，但可築垣之事，依大 犯土 不許容，
	10/11	今日造營始，左大臣二乘家，造立敷屋，先日光榮云，五星月可忌 犯土 者，
寛仁2 1018	3/19	今日見瘡鉢，可難治坎，尼君為避 犯(古)土 今曉渡差宰相宅，
寛仁3 1019	3/7	廿一日甲辰不動申修補日，別注不可 犯土 之由，不得其意，
	3/8	吉平朝臣云，十月廿一日御厄日不可 犯土 ，仍昨日注申不可 犯土 由，又云，淡天門以南一町當御忌方，今年不可 犯土 者，
	3/9	然布而如所申十月廿一日不可令 犯土 者，來月十四日可始修者，
	11/14	北隣，為避 犯土 ，黃旨歸，早朝宰相東帶來云，源納言頻語可参内之由，
	12/15	土用以後不可 犯土 者，勤不動文被留了者，左兵衛督來談次云，
寛仁4 1020	10/22	已亥，陰陽頭文高云， 土公 出入時刻，或書云，出入寅・申時者，
	10/23	此時 犯土 大凶害へ，土公遊方，甲子北遊，庚午還，戊寅日東遊，
治安3 1023	8/8	小女同車早朝渡西隣，為修補北垣破壊，余即歸，臨旨相迎婦，依 犯土 一，
	8/22	关丑，早旦小女同車渡西隣，為避 犯土 ，直合東對轡轡穴間，掘穴課畢余歸，
	9/1	御遊年在難方， 犯土 ・造作，在坤方之時可忌者，引新撰陰陽書勘申，勘申云，遊年方可被忌 犯土 事，陰陽書云，遊年方不可起土者，八卦法云，
		此方不可起功 犯土 類也，三公地基經曰，本命遊年之地 犯土 起功大凶云々，
		天祿四年，御遊年在餘巽之時，被停止件 犯土 畢，亦天延二年勘文云，宮御遊年在子，件方 犯土 造作被停止云々，
		權左中弁經頼來堂云，御遊年方 犯土 事申兩殿，
		吉平云， 犯土 ・造作事，然而只坤不可觸犯，是不指其凶惡，之輕凶也，命云，申輕凶由， 犯土 事有何事乎者，疑關難開，仍重問遣守道朝臣，送忠
		行・保憲等舊自筆勘文案三卷，件勘文皆勘申御遊年方重可忌 犯土 之由，
		或西翼或北方等，隨亦被止 犯土 之由已以分明，
	9/2	權弁朝臣來云，御遊年方 犯土 事先申關白，
		天祿四年五月廿五日保憲勘申云，東宮當御遊年方，可被忌 犯土 事，遊年方不可起土者，可被忌 犯土 事，但至于修理不見可忌之由，
		天延二年八月十日保憲勘申，宮廳今年當御忌方，不可被行 犯土 ・造作事者，
		仍不可被行 犯土 ・造作之狀，勘申如件，
		夏三月 土公 治門不可觸犯，凶，曆例云，大歳所在不可興功，動 土 ・舉造百
		事凶，今年大歳在子，三公地基經云，本命遊年之地 犯土 起功皆凶，
万寿2 1025	10/15	今夜更關渡北隣，宰相宅女同渡，依明旦 犯土 ，
	10/16	已癸剋請青宮若宮依法成寺 犯土 事渡給禪子雨閣二條第，月來内府往，
万寿4 1027	11/30	中將為避近隣 犯土 今朝渡北對，依方忌，入夜歸，
長元元 1028	7/10	口如土用事日不可 犯土 ，損卦用事日不可行征討也，
	7/20	昨日為避 犯土 關白室家白地渡朱雀院南殿，南階寄車云々，
	9/2	关巳，呼權弁章信令達 犯土 事於關白，日來關白尊堂被渡二條第，仍隨案内可進止，亦中宮渡給左衛門督家之後依不可 犯土 ，
		今明可令築東面垣，又坤方以步板可為垣，皆是 犯土 ，
	9/4	權弁傳關白命云， 犯土 更不可被忌者，權中將隆國來，
	9/4	明後日取案内可申者， 犯土 不可忌之由關白有命者，是權左中弁所來告，
長元3 1030	9/17	十四日而維摩會間且塔壇・石・壘等 犯土 間有憚，

・忍性（1217～1303）の活動が、いっそうの組織化、その内部統制の強化に果たした役割は絶大で、律宗の勧進による土木工事などへの動員の道がひらかれていたという³⁹⁾。

一方、松尾剛次⁴⁰⁾は、特に中世から明確な存在になっていくと述べ、

「癪者を中核として、広く癪者のイメージで捉えられた乞食、墓掘り、刑吏などといった役（職能）に従事した人」

とも示され、非人の解釈は、非常に難しいといえる。

また、古代から中世にかけて、都市部の河川敷や道路側溝には、一般の人々の死体も遺棄されていたことが史料や発掘調査により明らかになっている。背景には、本章で述べてきた「犯土」を忌避するという当時の人々の思想が影響し、穴を掘って遺体を埋葬する行為そのものが「犯土」となっていたとみられる。

さらに、「死穢」という意識が10世紀には存在していた⁴¹⁾。「死穢」とは、死体に触れたり、葬送、改葬、墓の発掘などに携わったために生ずる穢れで、それに触れると神事や内裏へ参ることをある一定期間忌み慎まなければならないのである⁴²⁾。

以上のような社会背景があっても、生活を営んでいくなかで、死体には触れず、土木事業を行わないという選択肢はなく、掘削を伴う実質的な作業に非人が関与していた。当時、非人は字のごとく、人に非ざると認識され、彼等には「犯土」の影響があたらないと解釈されていたと推察される。その非人の存在が歴史的に浮き彫りになってくるのは11世紀で、人々の間に「犯土」や「死穢」という意識が日記からみえてくる時期と重なる。

室町時代に入ると北山、東山文化が発達して作庭が盛んに行われ、私的な土木が目立つようになる。この時代の著名な作庭師であった善阿弥（生没年不詳）は、河原者出身で非人と同様の身分であった。「土木事業の空白期」とされる時代に死と直接的に関わる作業は、当時治療すると考えられていなかった病人や前科がある犯罪者といった社会集団から外れた、いわゆるアウトサイダーとされる人々しか関与できなかったと考えられる。なお、この節における論述は、現在の差別に繋がるものではなく、古代から中世の土木事業を解明していくため、この史実に迫っていくことは不可欠である。

5. 「土木事業の空白期」の僧による土木事業

ここまで、土を忌み嫌う「犯土」という思想が10世紀を中心として、「土木事業の空白期」に影響を及ぼしていたことを述べてきた。その空白期が存在していたとしても、全く土木事業が実施されなかったわけではなか

った。技術史⁴³⁾や中世史⁴⁵⁾を整理していくなかで、僧によって土木事業が実施されていたことがみえてきた。

そこで本章では、9世紀から11世紀における「土木事業の空白期」において、土木に関わったことが明確である図-5に示した空海、道昌、空也そして行円の4名の事績に関する一次史料を提示し、以下にまとめた。

さらに、「犯土」思想が、僧による土木事業に影響を与えていたのかについて考察を行った。

(1) 空海

満濃池は、大宝年間（701～704）に讃岐国の国守であった道守朝臣が創築したとされる。空海は、その満濃池を9世紀初頭、弘仁22（821）年6月より3ヶ月をかけて修築したとされる⁴⁶⁾。『日本後記』弘仁12（821）年5月⁴⁸⁾の部分を以下に示す。

「壬戌、讃岐国言、始自去年、隄満濃池、公大民少、成功末期、僧空海此土人也、山中座禅、獸馴鳥狎、海外求道、虚往実帰、因茲道俗欽風、民庶望影、居則生徒成市、出則追従如雲、今離旧土、常往京師、百姓恋実如父母、若聞師来、必倒履相迎、伏請充別当、令濟其事、許之、」

森田悌⁴⁹⁾の訳を次に示すと、

「讃岐国が次のように言上した。去年から満濃池の堤を修造する工事を始めていますが、事業規模が大なのに対し差発できる民は少なく、まだ完了していません。ところで、僧空海は当地出身の人物で、山中で修行して鳥獸に親しみ、海外にまで仏教の真理を求め、学問を積んで帰国しました。そのため、出家人も俗人も空海の風貌を敬い、人々は空海の姿を仰ぎ見えています。空海が留まる所には教えを請う者が市をなし、出行するとあとを追う者が雲のごとくとなります。いま、空海は郷里を離れ、平安京に住んでいます。百姓は父母のごとく恋慕しており、空海が来ると聞きますと、履物を逆さにしたまま慌てて迎えるほどです。伏して、空海を満濃池修造事業の別当に起用して完成させることを請願します。言上を許可した。」

図-5 空白期において土木事業に関わった僧の生没年一覧⁵⁰⁾

続く、同年の『日本紀略』弘仁 12 (821) 年 7 月 ⁵¹⁾の記録には、

「丁巳、新銭二万、施空海法師、」
さらに、『高野大師御廣傳』⁵²⁾にも、
「十二年七月丁巳、天皇施（施捨）給銭二萬」
と記されていることから、当月に満濃池が完成したと推測される。国は、讃岐国からの誓願を受けて、空海を別当（本官のある者が臨時に別の職に当る意 ⁵³⁾）として派遣して、満濃池修築の責任者になったのである。

(2) 道昌

道昌は、『元亨釈書』⁵⁴⁾によると、
「大井河湓。昌薫防遇。衆人子來。不日而成。故老拭淚曰。不料今復見行基菩薩。」
京都の大井河堰を修理したとされ、土木に関する業績は、この一事業のみが伝わる ⁵⁵⁾。その堰を修理した年代は、道昌の生没年からみて、9 世紀中に行われたとみられる。

(3) 空也

空也は、市中に念仏を勧めて廻り、諸国を巡って社会福祉事業を行った。天禄 3 (972) 年の空也が没した年に源為憲 (941~1011) が書き記したとされる『空也上人誄』⁵⁶⁾には、
「若親道路之嶮艱、預歎人馬之疲頓、乃荷鋤以鏟石面、而投杖以決水脈。」
若いときから鋤を用いて険しい道路を整え、杖を投げて水脈を当てていたとしている。12 年後、慶滋保胤 (943 頃~1002) が記した『日本往生極楽記』⁵⁷⁾では、
「沙門弘（空）也。不言父母。亡命在世。或云。出自横流口。常唱彌陀佛。故世號阿彌陀聖。或住市中作佛事。又號市聖。過嶮路即鏟之。當無橋亦造之。見無井則掘之。號曰阿彌陀井。」
『空也上人誄』に書かれた事績に加え、橋の造営と井戸の掘削、その井戸の名を「阿彌陀井」といったことが加わるが、具体的な事業が挙げられているわけではない。石井義長 ⁵⁸⁾は、特に空也は史料に恵まれてはいるが、事実が述べられるだけに過ぎないと述べている。しかしながら、先に提示した記録の執筆者である源為憲と慶滋保胤は、空也と同時代を生きた人物であるから、史料としての信頼性は高いものであると考えられる。

(4) 行円

行円は、藤原実資の『小右記』⁵⁹⁾、長和 5 (1016) 年 4 月 10 日の記述を見ると、
「從九日可令往還人拾栗田山石、又以鉄槌・鑽等、可破大石、忽令作鑽二可与者、（略）
皮聖從昨日令拾小石、亦破大石、往還人響應拾之、又大石少々破得、往反車馬破石之處既無停滯云々」

栗田（京都）の往還で通行人の協力を得て、石を拾い、大石を破る等して道路の整備をし、石を破った箇所は、車や馬が停滞することなく通行することができたと書かれている。藤原実資が依頼したわけではなく、行円からの要望があつて鉄槌と鑽を調達したものであつた ⁶⁰⁾。司馬遼太郎 ⁶¹⁾によれば、鉄器が普及したのは平安末期からであり、爆発的に庶民の手に幾らでも入るのは、室町時代であつたという。行円の活躍した時代は、まさに平安後期にあたり、鉄でできた農具は、一部の権力者が握っており、一般には流通していなかったと考えられる。

また、行円は皮聖とも呼ばれていた ⁶²⁾。行円に限らず、皮聖と称した人々は、その字のごとく、皮衣を着た僧を指し、穢れに関わる職能民として、4.(4)でも述べた非人と同様の扱いをされていた。

(5) 「犯土」思想が僧による土木事業へ与えた影響

本章では、9 世紀から 11 世紀の「土木事業の空白期」に僧によって行われた土木事業についてまとめた。その結果を踏まえ、10 世紀後半から 12 世紀初頭にかけて存在した「犯土」思想が、どのように影響を与えたのか、考察した。

「犯土」思想が文献にまだ現れない、9 世紀初頭の満濃池修築についてみていく。本事業は、讃岐国からの請願を受けて、空海を現地へ派遣しており、政府の関与が明らかである。一方、「犯土」や「死穢」といった思想が最も影響した長和 5 (1016) 年、行円によって道路整備が行われた。行円自身が必要な道具を揃えるよう、藤原実資に請願した事業で、政府側からの依頼ではなかった。このように、「犯土」思想が影響し、当時の政府や役人は、土木を積極的に行っていなかったと考えられる。

平安時代後期の11世紀頃からは、非人の存在が明確になっていった。先に示した行円も皮聖と呼ばれ、非人と同様に差別されており、彼らが葬送や土木事業などを請け負うようになった。続く鎌倉時代には、叡尊 (1201~1290) や忍性 (1217~1303) が、彼らを組織化していった。「土木事業の空白期」を抜け出たとしても、すぐに一般の人々が、土木事業に関与することはなく、「犯土」という思想が、人々に影響を与え続けたと推測される。

人々の目には見えない、土や死に対する恐怖を乗り越えて作業を行うためには、仏教の力に頼らざるを得ず、僧が土木事業を主導し、実質的な作業を沙弥や癪病患者等を含む非人が実施するようになっていったとみられる。

6. まとめ

1 章では、わが国の近世以前「古代~中世」における土木史に関する研究の蓄積が少ない事に触れ、2 章では、

平安時代を中心として、古代からの土木事業を整理していくと、8世紀には、積極的に土木事業が実施されていた。しかし、10世紀をピークとして、9世紀から11世紀において、「土木事業の空白期」が存在しており、本研究の対象時代とした。

続く中世は、8世紀や16世紀にみられる土木事業数の大幅な増加はみられず、「土木事業の空白期」を完全に抜け出す転換期とはならなかったとみられる。

その空白期の一因になったとみられるのが4章で示した「犯土」という思想であった。この思想は、平安時代の陰陽道に端を発し、平安貴族を中心に広まっていったと考えられる。「犯土」が史料上に表れるようになるのは、国家運営の手引書『朝野群載』で、天延2(974)年の項であった。各人の日記等では、10世紀後半から12世紀初頭まで「犯土」の記述を確認する事ができた。

日本に陰陽道が伝わったのは、『日本書紀』の記述から、継体天皇7(513)年⁶⁵⁾であるとか、推古10(602)年とされる⁶⁶⁾。「犯土」思想は、わが国で生まれた思想であったと考えられ、土を動かしたり、掘ったりすることを禁ずる思想によって、土木事業が停滞していたといえる。また、人々の間には、死と直結し、その穢れを忌み嫌っていた「死穢」という意識も影響していた。

このように、9世紀から11世紀には、「土木事業の空白期」であっても、僧によって土木は行われており、5章では、空白期に活躍した僧の事績をまとめた。

「犯土」思想の影響を最も受けていた10世紀に活躍した空也は、橋の造営や道路整備などの土木事業を行っていた。しかし、その具体的な事例や作業内容については不明なものであった。

さらに、長和5(1016)年の行円による道路整備は、中央政府から依頼されたものではなかった。行円自らが藤原実資に対して、土木作業を行う道具の調達を請願したものであり、空白期の政府や役人は、土木事業を積極的に行っていなかったとみられる。また、僧による土木の事例は非常に少なく、文献の記述に頼るところが大きい。それらは、発掘遺跡などの痕跡としても残っておらず、彼らによる土木事業がどのようなものであったのか、具体的な作業内容を明らかにすることができない現状にある。平安後期の11世紀からは、中世から明確な存在となっていく非人と呼ばれた人々が、葬送や土木事業を行うようになった。

わが国では、646(大化2)年の大化改新以後、701(大宝元)年には大宝律令が完成し、律令国家が成立した。しかし、8世紀後半から9世紀には班田収授の実行ができなくなるなど、10世紀の初めには律令体制としての機能が失われていったとみられる。本研究の対象とした9世紀から11世紀における「土木事業の空白期」の存在は、これら一連の律令国家の崩壊と合致する。政

治体制の変革に「犯土」という思想が加わった事で、10世紀をピークとした空白期が生まれたと思われる。

参考文献

- 1) 阿部貴弘, 西山孝樹, 知野泰明, 田村隆彦: 歴史まちづくりに関する土木史研究の動向について, 土木史研究講演集, Vol.31, pp.159, 2011.
- 2) 前掲 1), pp.155-160.
- 3) 白石太一郎: 『古代を考える 終末期古墳と古代国家 古墳の終末と古代国家』, pp.302-314, 吉川弘文館, 2005.
- 4) 河上邦彦: 『古墳が消えるとき 終末期古墳から火葬墓へー大和を中心としてー』, pp.8-9, p.45, 奈良県立橿原考古学研究所, 1997.
- 5) 武部健一: 『完全踏査 古代の道 畿内・東海道・東山道・北陸道』, pp.2-20, 吉川弘文館, 2004.
- 6) 武部健一: 『完全踏査 続古代の道 山陰道・山陽道・南海道・西海道』, pp.2-11, 吉川弘文館, 2005.
- 7) 森田悌: 『日本後紀(中)』, pp.217-219, 講談社学術文庫, 2007.
- 8) 鈴木達也, 藤田龍之, 知野泰明: 六国史・風土記に見られる古代日本の土木事業に関する文献調査, 土木史研究講演集, Vol.25, pp.333-338, 2005.
- 9) 三浦基弘, 岡本義喬: 『日本土木史総合年表』, pp.34-51, 東京堂出版, 2004.
- 10) 高橋慎一郎 編, 中澤克昭: 『史跡で読む日本の歴史6 鎌倉の世界』, pp.74-77, 吉川弘文館, 2010.
- 11) 高橋裕: 『現代日本土木史 第二版』, 付表 日本土木史年表, 彰国社, 2007.
- 12) 前掲9), p.50.
- 13) 土木学会: 『明治以前日本土木史』, p.14, 岩波書店, 1936.
- 14) 前掲 13), pp.265-266.
- 15) 西山孝樹, 知野泰明: 紀の川上・中流域における近世中期以前の灌漑水利の変遷に関する研究, 土木学会論文集 D2(土木史), Vol.68, No.1, pp.11-21, 2012.
- 16) 中尾堯: 『中世の勧進聖と舍利信仰』, pp.154-180, 吉川弘文館, 2001.
- 17) 高橋裕監修, 加古里子, 緒方英樹: 『人をたすけ国をつくったお坊さんたち』, (財) 全国建設研修センター, 1997.
- 18) 長尾義三: 『物語日本の土木史-大地を築いた男たち-』, 付録「物語日本の土木史」年表, 鹿島出版会, 1985.
- 19) 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部: 『日本国語大辞典第二版第十二巻』, p.260, 小学館, 2001.
- 20) 山下克明: 『平安時代の宗教文化と陰陽道』, p.5, p.22, p.90, 岩田書院, 1998.
- 21) 深澤瞳: 『狭衣物語』の土忌, 倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』, p.234, 森話社, 2010.
- 22) 繁田信一: 『平安貴族と陰陽師 安倍晴明の歴史民俗学』, pp.53-75, 吉川弘文館, 2005.

- 23) 黒坂勝美:『新訂増補國史大系 第二十九卷上 朝野群載』, pp.366-367, 吉川弘文館, 2003.
- 24) 井原今朝男:『増補 中世寺院と民衆』, pp.222-225, 臨川書店, 2009.
- 25) 前掲21), p.240.
- 26) 黒崎直:『水洗トイレは古代にもあった トイレ考古学入門』, pp.126-129, 吉川弘文館, 2009.
- 27) 秋田裕毅:『ものと人間の文化史 150・井戸』, pp.34-37, 法政大学出版局, 2010.
- 28) 鐘方正樹:『ものが語る歴史シリーズ8 井戸の考古学』, pp.155-171, 同成社, 2003.
- 29) 東京大学史料編纂所:『大日本古記録 小右記一〜九』, 岩波書店, 2001.
- 30) 倉本一宏:『御堂関白記(上)(中)(下)』, 講談社学術文庫, 2009.
- 31) 上村悦子:『蜻蛉日記(上)(中)(下)』, 講談社学術文庫, 2009.
- 32) 東京大学史料編纂所:『大日本古記録 中右記一〜六』, 岩波書店, 1993-2008.
- 33) 橋本義彦ほか:『日本歴史「古記録」綜覧古代・中世編』, pp.64, 新人物往来社, 1990.
- 34) 増補史料大成刊行会編:『中右記』一〜七, 臨川書店, 2001.
- 35) 永原慶二, 貴志正造:『全譯 吾妻鏡第三卷』, p.225, 新人物往来社, 1987.
- 36) 網野善彦:『異形の王権』, pp.17-19, 平凡社, 1993.
- 37) 松尾剛次:『葬式仏教の誕生』, pp.42-45, 平凡社, 2011.
- 38) 網野善彦:『中世の非人と遊女』, pp.33-34, 講談社学術文庫, 2008.
- 39) 網野善彦:『日本中世の百姓と職能民』, pp.198-200, 平凡社, 2008.
- 40) 松尾剛次:『中世の都市と非人』, pp.3-8, 法藏館, 1998.
- 41) 前掲37), pp.44-45.
- 42) 前掲41)
- 43) 永原慶二, 山口啓二:『講座・日本技術の社会史 第六巻 土木』, 日本評論社, 1984.
- 44) 門脇禎二, 朝尾直弘:『京の鴨川と橋』, 思文閣出版, 2001.
- 45) 三浦圭一:『日本中世の地域と社会』, 思文閣出版, 1993.
- 46) 宮坂有勝:『空海生涯と思想』, pp.37-38, 筑摩書房, 1984.
- 47) 和多秀乗, 高木神元:『日本名僧論集第三卷 空海』, pp.1720, 吉川弘文館, 1982.
- 48) 森田悌:『日本後紀(下)』, pp.102-103, 講談社学術文庫, 2007.
- 49) 前掲48), p.102.
- 50) 『国史大辞典』を基に筆者作成.
- 51) 望月二郎:『国史大系 第5巻』, pp.436-437, 経済雑誌社, 1897.
- 52) 塙己一:『續群書類従・第八輯下 傳部』, pp.632-633, 續群書類従完成会, 1927.
- 53) 新村出:『広辞苑 第三版』, p.2160, 岩波書店, 1987.
- 54) 望月二郎:『元亨釈書』, pp.684-685, 経済雑誌社, 1901.
- 55) 国史大辞典編集委員会:『国史大辞典 第10巻』, p.108, 吉川弘文館, 1989.
- 56) 石井義長:『空也—我が国の念仏の祖師と申すべし—』, 資料1 空也上人誄, ミネルヴァ書房, 2009.
- 57) 塙保己一:『群書類従・第五輯』, p.403, 續群書類従完成会, 1930.
- 58) 前掲56), pp.99-100.
- 59) 大塚信一:『小右記(四)』, p.178, 東京大学史料編纂所, 1967.
- 60) 前掲43), pp.125-127.
- 61) 司馬遼太郎:『対談集 日本人の顔』, p.146, 朝日新聞社, 1997.
- 62) 前掲38), pp.36-37.
- 63) 村山修一:『日本陰陽道史総説』, p.26, 塙書房, 1981.
- 64) 前掲20), p.26.

(2012. 1. 27 受付)

A STUDY ON THE “BLANK TIME PERIOD FOR CIVIL ENGINEERING PROJECTS” IN JAPAN DURING THE HEIAN PERIOD

Takaki NISHIYAMA, Tatsushi FUJITA and Yasuaki CHINO

This study identifies the “blank time period for civil engineering projects” that existed in Japan from the 9th century to the 11th century, peaking in the 10th century. The most influential underlying factor for this period is thought to be the collapse of the Ritsuryō state in the 10th century. Another more direct cause was the existence of the ideology of “Bon-do (the *onmyōdō* idea of avoiding digging or moving soil so as not to be cursed by the earth god)” that was widely held among the Heian Aristocrats in the 10th and 11th centuries. This study shows that this ideology had an influence on the “blank time period for civil engineering projects.” However, this does not mean that no civil engineering projects were undertaken during this blank time period; some projects were carried out as welfare work by Buddhist priests.